

[資料 1]

第 2 期事業報告書

(平成 18 年 6 月 1 日～平成 19 年 5 月 31 日)

平成 19 年 5 月

特定非営利活動法人
まちづくり支援えひめ

1. 「坂の上の雲」まちづくり市民塾（第三期・後期）　《松山市委託事業》

（1）事業の概要

【講座の目的】

塾生が地域資源を活かしたまちづくり活動におけるコーディネーターに求められる資質とスキルとは何かを認識し、グループワークなどの体験を通してそのスキルを体得することを目的とする。また、市民活動団体同士や地域住民などのネットワークの大切さや、地域社会の中で市民活動団体や市民が担うべき役割、自身がステップアップしていく目標等を全体の講座を通して身につけていくことを支援する。

【全体の構成】

実践編・その1◆平成18年4月～平成18年9月

『まちづくりとは』

地域の資源を活用するフィールドミュージアムづくりを支援するコーディネーターの要請を図るためには、フィールドミュージアムにおけるまちづくりとは何かについて検討する。また、まちづくりの現場において、よく用いられる手法としてゲストを招聘して講座を開く手法がとられる。そこで、外部講師を中心とした研修主体のまちづくり講座を展開する。

実践編・その2◆平成18年10月～平成19年2月

『企画・実施を体験しよう』

地域の資源をつないで新しい価値やサービス等を生み出す役割を担うまちづくりコーディネーターとしての発想を身につけるためには、市民活動の各分野で今何が課題か、身近にどういう人たちが活躍しているかを把握する必要がある。そこで、まちづくりの課題の把握能力、人材のネットワークの構築能力や講座開催能力等を体得するために、塾生が市民活動の各分野で活躍する団体と連携し、それらの団体の運営にかかわりながら、まちづくり支援について体験する講座を、自分たちの企画運営により開催する。

（2）各回講座の報告

I. 実践編・その1「まちづくりとは」

◆第2回講座「フィールドミュージアム作りに向けたまちづくり支援とは」

講師：宮本倫明

□日時：平成18年6月23日（金）19:00～21:00

□場所：松山市総合福祉センター 5階ボランティア研修室

□参加者：13名

◆第3回講座「地縁型組織活動とは」 講師：白方雅博

□日時：平成18年7月28日（金）19:00～21:00

□場所：松山市総合福祉センター 中会議室（5階）

□参加者：9名

◆第4回講座「市民活動とは」 講師：萩森一路

□日時：平成18年8月9日（水）19:00～21:00

□場所：松山市総合福祉センター 小会議室（5階）

□参加者：15名

◆第5回講座「協働とは」 講師：内田洋子

□日時：平成18年10月5日（木）19:00～21:00

□場所：松山市総合福祉センター ボランティア研修室

□参加者：14名

II.実践編・その2「企画・実施を体験しよう」

◆後半第1回講座

□日時：平成18年10月19日（木）19:00～21:00

□会場：コムズ 会議室3

□参加者：14名

□内容：庚申庵倶楽部と伊予山の辺の道の2団体の中間支援実地研修について

◆“山の辺の道から庚申庵体験ウォーク

□日時：平成18年11月5日（日）8:30～15:30

□会場：庚申庵

□参加者：12名

□内容：山の辺の道から庚申庵体験ウォーク後、庚申庵にてミーティング

◆後半第2回講座

□日時：平成18年11月12日（日）12:30～17:00

□会場：庚申庵

□参加者：14名

□内容：庚申庵史跡庭園イベント“秋風コンサート”観賞後、庚申庵にてミーティング
ファシリテーター：武田さん

◆後半第3回講座

□日時：平成18年12月5日（火）19:00～21:00

□会場：コムズ 会議室3

□参加者：11名

□内容：シミュレーション「山の辺の道と庚申庵のネットワーク支援」
ファシリテーター：宮川さん

◆後半第4回講座

□日時：平成19年1月19日（金）19:00～21:00

□会場：コムズ 会議室3

参加者：14名

内 容：シミュレーション「山の辺の道と庚申庵のネットワーク支援」
ファシリテーター：宮川さん

◆後半第5回講座

日 時：平成19年2月9日(金) 19:00～21:00

会 場：コムズ 会議室3

内 容：シミュレーション「山の辺の道と庚申庵のネットワーク支援」
ファシリテーター：武田さん

◆後半第6回講座

日 時：平成19年2月27日(火) 19:00～21:00

会 場：コムズ 会議室3

参加者：18名

内 容：伊予山の辺の道と庚申庵の2団体の協働事業（コラボレーション）のま
とめと、フィールドミュージアムサポーターの申請、登録について

◆視察旅行（高知県赤岡町「冬の夏祭り」）

趣旨

・まちづくり支援を行っている団体との交流を行い、具体的な活動のイメージを取得
する。

経緯

第5回講座の講師、内田洋子さん（高知市民会議事務局長）に高知市民会議への視察
を依頼したところ、香南市赤岡町の“冬の夏祭り”という事業を勧められました。
この事業は高知市民会議の畠中洋行さんが手がけてきた事業で、住民が主体的にま
ちづくりに関わっている町ということです。

日 時：12月3日（日）

参加者：8名

◆卒塾式

日 時：平成19年3月27日(火) 19:00～20:00

会 場：松山市総合福祉センター ボランティア研修室

参加者：17名

内 容：修了証授与

(3)「坂の上の雲」まちづくり市民塾（第三期・後期）を終えて

平成18年4月27日の事前講座以来、14回にわたるまちづくり市民塾を開催して
きた。前期のまちづくり市民塾の目的は、入塾式の担当部署からも松山のフィー
ルドを支えるのは市民であり、官民のつなぎ役としての人材を養成することが目的
であり、坂の上の雲のまちづくりに関わる市民の自主的な活動を実施しているあるい

はしようとしている団体に対する協働事業を実現するためのノウハウの取得が一義であった。それは後期の市民塾についても同様である。しかしながら、今までの基礎的なスキルを中心とした学習だけではなく、地域資源を活用したまちづくりとはどのようなものなのか、それを支えるグループはどのようなものなのか、協働することのイメージはどうか、について学習することも必要である。このため、前半は講座形式による学習機会を提供することとした。前期の報告書にも記述しているが、市民と公共的諸力との相互連携・調整、政策提言などは、行政と市民社会側がそれぞれ独自の役割を果たすことが求められる。このときに、両者の連携をサポートする中間支援的な役割が必要とある。このような中間支援型活動の役割と機能は、どのようなものであるのかについて、以下にまとめてみる。

1. 中間支援組織(インターメディアリー)の役割・機能

中間支援組織とは、市民活動団体と行政とを仲介する立場にあつて、一方で市民活動団体に対して、市民活動相互の連携や情報交換、情報やスキル、ノウハウの提供などの機能を持っている。他方で行政に対しては、市民活動全体の立場を踏まえた提言を行うなどの機能がある。このようにして行政と市民社会との仲介役を務めるのが中間支援組織であり、次の4つの機能が考えられる。

ア. ネットワーク機能

中間支援組織の基本的な役割として、特定テーマや関連する情報の共有化や情報交換、課題解決への相互支援などがあり、そのためには個別の活動団体等のネットワーク化を図る役割がある。

イ. コーディネート機能

ネットワーク機能を活かして、市民活動団体と行政、多様な主体間のつなぎ役などを実践しつつ、合意形成やマネジメントなどの協働のスキルを提供する。

ウ. 提言機能

協働の事業スキームの組み立て、協働にふさわしい業務委託方式のあり方、協働事業を促進する条例や指針などの仕組みづくりなどの提言機能が求められる。

エ. 資金支援機能

中間組織のひとつにNPOへの資金面の支援の機能がある。社会福祉協議会などがこうした機能をもった中間組織としては存在してきたといえる。資金提供機能については、協働事業のあらゆるステップでの参画、特に事前の意思決定と事後の評価における透明で民主的なプロセスを実現して行くことが求められる。

2. 協働を支援する中間支援組織の諸類型

中間支援組織の活動状況から次の3つの類型に分類できる。

ア. 総合型

NPO・まちづくり・環境などの多様なテーマで、比較的総合的な取り組みを実践している中間支援組織であり、多分野の専門家との連携ができるなど、市民活動と行政の間であって、ネットワーク力、コーディネート力が特徴である。

イ. テーマ型

町並み、民家再生、島の再生、昔話などの特定テーマで活動するNPOを支援する中間支援組織で、機動力と専門性の高さが特徴である。

ウ. 地域型

特定地域をフィールドに活動するNPOを支援する中間組織で、郊外部、都心部、河川流域などフィールドとしては多彩なものがあります。市民活動と行政の間であって、地域でのネットワーク力とコーディネート力の強さが持ち味です。

3. 中間支援組織を担う人材

従来の地域社会において、行政は、誘導・調整など大きな役割を担ってきた。しかし、地域ニーズの多様化・増大により協働の必要性が叫ばれる中で、行政や個々の活動を行っている団体がそれぞれ誘導・調整にあたることには限界があることが明確になってきており、ここに中間支援組織の意義と役割が存在する。

一方、地域社会の必要に根差して継続的に活動し、自主的な研修なども重ねつつ高度な専門知識と力量を持つ市民が数多く輩出されつつある。このような人たちとのネットワークにより、中間支援が行われることになるが、ここでは、それらの事業を担う人材について整理する。

中間支援機能というと、不足しているモノ（情報・知識・能力等）を補完・代行したり、課題などによるこう着状態に解答を与えたりするものというイメージが一般的にあり、これらの機能を担う人材には、「私に任せて」的な発想と行動よりも、当事者そのものに一歩足を踏み出させる言動が求められる。このため、中間支援組織のスタッフは、協働事業の支援活動においてそれぞれの持つ能力を状況にあわせた応援団的機能を発揮し、結果として組織としての支援・仲介が行われたという形が求められる。

そして、こうした能力・姿勢を必要とするスタッフを育てていくには、従来の市民活動の「経験」と大学など知識や情報が集積される場所における「専門知識」だけでは限界があり、双方を相互に関係付けることによって生まれる、新しい「能力」の形成が重要となる。

(4) まちづくり市民塾・後期のまとめ

まちづくり市民塾・後期では、上記の考察を基に当面の取得すべき能力として、以下の2つの能力に着目して講座を構成した。

- ・ まちづくりに対する理念を学習し、理解し、それを支援する能力
- ・ 団体支援のうち協働を支援する能力

まちづくり支援に関する能力については、様々なまちづくりのステージについて事例を中心にして学習するとともに、それらの担い手になる団体（地域住民、NPO団体、中間支援団体）の特長について、先進地からの講師を招いて講座を開催した。

団体の協働を支援する能力については、ヒアリングを通じた支援対象団体の状況の把握、問題点の整理及び把握、議論を重ねることによる問題点や課題の克服、新たな企画の提案などの中間支援機能を果たす場合に基本となる能力である。

また、会議を効率よく進めることも重要なポイントである。

このため、実際に2つの団体をマッチングし、両団体の特長や問題点を把握することにより、両者のコラボレーションを構築するための共通目標づくりを支援する実地の研修を行った。

これらの一連の講座の評価は、振り返りの会で明らかにしているが、要点をまとめると次のようになる。

- ・ 団体の連携に向けた体験ができたことは評価できる。
- ・ マッチングに向けて新しいスキルを学ぶことができた。
- ・ ファシリテーターの技術（目的と目標を共有するための手法、グループワークの手法、会議の組み立てを行う手法、コミュニケーション《人の意見を聞くことなど》の手法、議事録を作成する手法）を活用するきっかけとなった。
- ・ 第一線で活躍する人たちの話が参考になった。
- ・ 坂の上の雲の理念について勉強するきっかけとなった。
- ・ 行政との協働について、行政と意見交換ができた。
- ・ 市民間の協働について意見交換ができた。
- ・ まちづくりの懐の広さが感じられた。
- ・ 多様な人材の必要性が理解できた。

などの一定の評価を得たといえる。

しかしながら以下のような問題点も指摘されている。

- ・ 集中的な開催の方式が良かったのでは。
- ・ 市民塾で育った人材が定着しなかった。
- ・ 地域資源に対する考え方が混乱した。
- ・ ファシリテーションの技術と自分のやりたいこととの接点が見つからなかった。
- ・ 何ができるかわからない。
- ・ シミュレーションと現実の問題が混乱した。

- ・ ネットワーク化（連携）の方向性が理解できなかった。
- ・ ゴールがわからなかった。
- ・ 市と協働できればよかった。
- ・ 市の参加が不十分だった。
- ・ 塾生の思いを取り入れるべきだった。
- ・ フィールドサポーターとしてのニーズがあるのか不安になった。

これらの指摘の多くは、塾生のニーズと今回の講座で提供できたものとのマッチングが十分ではなく、疑問が残った部分も多かった。まちづくり市民塾を進めていく中で、その違いが明確になったことがある。それは、塾生が求めてきたものが行政との協働にあった。行政に対して意見を言える環境を求めていたことであった。

一方講座を展開する事務局側としては、あくまでも行政と協働したい、連携したいと思う人たちに対してサポートするためのスキルを提供しようとしていた。そこにマッチングしない面があったといえる。

しかしながら、フィールドサポーターの役割は、あくまでも団体の課題を明らかにし、団体が活動しやすくするためのアドバイスをすることである。そのためのスキルの取得を目的とする必要があるのである。したがって今後の課題として、次の二つの方向性での講座を展開することが求められる。

ひとつは、（仮）坂の上の雲記念館におけるまちづくり支援機能を担う外部スタッフ養成と言う観点からは、中間支援の実践的な能力の取得が求められる。このためには、塾生という立場から一步踏み出すことが求められる。今回の講座では、シミュレーションを体験するという手法をとったが、今後は、現実の支援活動の場でこのような能力を取得する必要がある。

一方で、塾生のニーズにも関係するところであるが、中間支援機能を提供する組織のメンバーとしての役割よりも、普段は自分たちのミッションに関する活動を行っている。中間支援的能力を直接取得するだけでなく、自分たちの活動を展開していく能力を取得することによって、その能力を活用して必要に応じて他の団体での課題等を解決するための支援を行うというかわり方も考えられる。この場合は、自分たちの団体の活動を効率的に進めていくスキルが身につけば、その役割を果たすことは可能である。この場合、そのために事務局的な機能は別途必要であることはいうまでもない。

今後は、これらの方向性に基づいて、卒塾生との議論を行いながら、実践の場での研修、地域資源の活用における具体的なテーマの研修及びその局面における中間

支援のあり方についての研修、他の組織との交流、協働事業という面での行政とのかかわり方等についてのスキルアップを目指す必要がある。

中間支援のスキルについて実践を通してのスキルアップを恒常的に進めていく講座と、坂の上の雲のまちづくりに関する具体的なテーマを設けて、地域資源を活用したまちづくりに関する知識を広げていく講座との2段階の構成で中間支援の能力を取得していくことを検討する必要がある。

2. 大三島自転車モデルコースづくり事業 《愛媛県委託事業》

(1) 事業の概要

今治と尾道を約 80 km のサイクリングロードで結んだ『しまなみ海道』は、全国のサイクリストたちから「一度は走ってみたい道」と広く知られている。本事業は、しまなみ海道でつながる伯方島・大三島・大島の各島で、順次、島内の自転車モデルコースを作成し、地域の活性化を目指すものであり、本年は大三島での実施となった。

大山祇神社や多々羅大橋、多々羅しまなみ公園など、全国的な集客拠点が点在している大三島は、多くの観光客が訪れる島である。しかしながら、観光客の通過化、滞留時間の短縮化が顕著などの課題がある。そこで、島の豊かな自然（景観）、歴史、文化、人など、島にしかない地域資源を抽出し、それらに触れるための周遊ルートを設定することを通して、大山祇神社など知名度の高い集客拠点到留まらず、島全体を周遊してもらうことをビジョンとした。

また、平成 17 年度の伯方島での実施の際、地域住民がサイクリングロードの魅力に気が付いていないことが感じられた。今回は、事業実施前に、地元商工会のメンバーに対して事前ヒアリングを行い、地域住民の意識の現状をリサーチした。結果、伯方島と同様、島の活性化については意識があるものの、サイクリングを通してという意識は持っていないことが明らかとなった。

本事業は、地域住民の意見をもとにした、自転車モデルコースの設定とサイン整備に関する考え方が求められている。いかに住民の皆さんにサイクリングに関する気づきを提供し、それらに関する意見を引き出すことができるのかがポイントであると感じられた。そこで、事業実施前に説明会を実施し、住民の主体的関与を促すこととした。

事前説明会では、この指とまれ型の実行委員会方式でメンバーを募集した。自治会、商工会、観光ボランティアグループ、その他関係者など、地元住民に幅広く参加を呼びかけることができ、また、メンバーには本事業の目的と全体像が浸透し、説明会の実施は有意義だったと言える。

その後の取り組みは、参加型のワークショップ形式で進めた。メンバーは利用者の視点を交えた形で島の地域資源の活用や維持について議論した。島の地域資源を住民達自らが発掘する作業は楽しく、また、地域資源をつないだ自転車モデルコースの設定は、それらを育て上げることにつながり、高齢化、自治力の低下により失ってきつつある地域への誇り、愛着を高め、もともと保有していた来訪者をもてなす心を再醸成することに貢献できたと考える。

成果物としてここに提案するコースは、全てオリジナルなコースである。島内のしまなみ海道のサイクルコースは、全長約 8 Km と短く、島の東側一部を通過してしまうが、大規模自転車道は国道 317 号、県道大三島上浦線、同大三島環状線上に島内を S 字型に巡るように整備されている。自転車による周遊促進に向けては、これらの自転車道を大いに活用した。また、既存の自転車道以外の活用も進み、結果として島を八の字に巡ることができ

るコースとなっている。また、サイン計画については、一方的なデザイン案としてまとめるのではなく、住民の声や観光客のニーズを重視した情報提供中心の提案としてまとめた。

本事業は単にコースを設定するだけでなく住民による地域資源の活用プランとなるよう、コースを生かすための仕組みや体制づくりについても協議し、実現していくことを目標としていた。ワークショップの中で、マイロード制度を活用した地域活動、地域資源の維持に向けたイベントの開催、ビジネスモデルの構築等があり、住民が主体性をもった新たな活動が芽生える可能性を感じた。今後、事業の成果を地域の総意とし、地域で活用が進むよう、成果をフィードバックすることが求められる。既存の組織がゆるやかなネットワークを組み、継続的に活用していくことが理想的で、そのためには、当分の間、中間支援組織の関わりが必要であると思われる。

本事業で培われたノウハウは、昨年度実施した伯方島での経験も踏まえながら、大島の事業展開に向けて大きなシミュレーションとして活用して頂きたい。あわせて、本事業の特長である行政とNPOとの協働についても、そのノウハウ、事業成果等に対する評価を行い、今後の事業展開の参考に資することとした。

(2) 各回ワークショップの報告

1. 事業説明会

日 時；平成 18 年 8 月 25 日（金）

場 所；大三島公民館中ホール

参加者；29名

内 容；地域住民に事業の目的と概要を説明した。

成 果；事業の目的と概要を概ねご理解いただいた実行委員 53 名が集まった。

事業目的に共感してくれる方を募りたいと事業説明会を開催した。事業概要の共有が進み、さらに設置予定の休憩所の管理、モデルコースの情報発信など、事業終了後の地域の関わり大切さへも議論が及んだ。参加者が少なかったことは課題だが、参加者の過半数が実行委員としての参加を表明するなど有意義だった。具体的な事業スタートとなる第 1 回ワークショップまでに、より多くの住民の参加を得られるよう、事業周知を徹底することを確認し、終了した。

2. 第 1 回ワークショップ

日 時；平成 18 年 9 月 28 日（木）

場 所；大三島公民館大ホール

参加者；大三島町住民 23 名・上浦町住民 7 名・島外住民 1 名

内 容；地域資源の洗い出しとそれをつなぐ周遊コースを作成した。

成 果；地域資源をつないだ 9 つのコースができた。

地元を中心に約30名の市民が実行委員として集まり、第1回ワークショップを開催した。事前の事業説明会があったことで、目的共有はスムーズに進み、地域資源抽出、コースづくりの作業に十分な時間をとることができた。活発な意見交換が行われた結果、9つの魅力あるコースが提案された。「歴史巡りコース」「体験コース」など、4時間の自転車周遊コースである。次回のワークショップでは、これらのコースを基盤に、モデルコース完成を目指すことを確認し、終了した。

3. 第2回ワークショップ

日 時；平成18年10月25日（水）

場 所；今治市上浦開発総合センター

参加者；大三島町住民14名・上浦町住民12名・島外住民2名

内 容；提案された9つのコースを、5つの地区ごとに再検討した。

成 果；9つのコースから5つのコースができた。

ワークシートに従い、提案された9つの周遊コースの再検討を行なった。地域資源を一つ一つ吟味しながら進めるコースづくりは、とても楽しい作業となった。時間配分や対象の具体的なイメージを共有しながら、主に5地区を巡るおすすめコースを完成させた。次回のワークショップでは、地元の学生や今治サイクリング協会メンバーなどの協力を仰ぎ、路面の状況や勾配を走行して確認したり、体験の愉しさを体感したりするなど、コースを検証することを確認し、終了した。

4. 第3回ワークショップ

日 時；平成18年11月26日（日）

場 所；大三島内全域

参加者；大三島町住民4名・上浦町住民1名・島外住民3名

内 容；5つのモデルコースを試走した。

成 果；試走によるコースのチェックが進み、コースのコンセプトやコース上の課題が認識できた。

5つのモデルコースを試走し、路面の状況や勾配の確認、景観・体験メニュー・食事などの魅力を検証した。住民にとって見過ごしていたまちの素顔に出会う機会となった。島外者として検証に協力をいただいたサイクリストからは、走行中の安全性確保の提案をいただいた。次回のワークショップでは、本試走での気付きをもとに必要な案内板や休憩所などの整備と訪れる観光客と住民の関わりについて、ディスカッションすることを確認し、終了した。

5. 第4回ワークショップ

日 時；平成18年12月7日（木）

場 所；大三島公民館大ホール

参加者；大三島町住民 15 名・上浦町住民 2 名・島外住民 2 名

内 容；提案するモデルコースを承認し、その後、コース上の課題、その解決策を話し合った。

成 果；5つのコースを最終決定した。今後の活動に向けての確認をした。

これまでのワークショップでほぼ固まっていたモデルコースへ参加者の意見が加味され、5つの最終提案コースが承認された。その後、提案するコースにおける安全面への配慮や立ち寄りポイント確認のために必要なサインなど、整備すべき事項を共有した。コース充実のために求められる立ち寄りポイントにおける案内ガイドや清掃活動などの住民の関わりについては、既存の担い手やシステムが説明され、その不足を補う議論が進んだ。

参加者共通の大きな関心事項は、島の活性化である。自転車モデルコースづくりは、そのための手段に過ぎない。参加者からは「この事業を通して、何が生まれるのかが大事。もっとゆっくり議論したい。」「せっかくできた自転車コースを観光客にはもちろん、住民にも活用してもらいたい」との声が聞かれた。事業は終了したが、提案する5つのモデルコースをみんなで活用し、島を元気にしていく出発点に立ったように思う。今後、地域の輪が広がることを願い、事業の成果報告会を開催したいと考えている。

（3）実現に向けた今後の課題

今回の事業において、受託者であるまちづくり支援えひめとしては、「住民支援、地域の活性化」という目標をもって事前説明会やワークショップに臨んだ。その結果、住民自らが「地域の様々な資源や課題に気がつくことができたり、共有できたりした」ことは、とても大きな成果であると言える。また、これらの資源の抽出や課題の把握にあたって、地元と一緒に考え支援できる中間支援型団体の存在に効果があることも実証されたように思える。そして、本事業で設定した自転車モデルコースや伝達すべき内容を表現するサインの考え方、さらにはそれらに対して住民がどうかかわっていったらいいのかに関する課題を次のとおり整理してみた。

1.モデルコースについて

ここで設定された自転車モデルコースは、次のような考え方による。道、体験、眺望、食事場所等を中心とした地域資源を抽出し、コンセプトに基づいて線として連結した。これに加えて、レンタサイクルの活用を前提とし、これらの拠点となるしまなみの駅「御島」と「道の駅多々羅しまなみ公園」を起終点とした5つのおすすめコースにまとめあげられた。

ここで、抽出された地域資源については、ワークショップに参加したスタッフからは、十分なものが抽出されたという意見とまだまだ不十分ではという意見とに分かれている。この問題については、どこまで抽出すれば十分というものではなく、今後の活動の中で抽

出されたものが蓄積されていく仕組みが構築されているかどうかということが重要である。この意味では、しまなみの駅「御島」を中心とした観光ボランティアガイドのグループにおいては、定期的な勉強会の開催等の提案がなされるなど一定の仕組みが構築されそうである。一方、道の駅多々羅しまなみ公園を中心とした活動では、地域のグループづくりから始める必要があり、今回の事業だけでは不十分な面もあり、継続的な働きかけの必要性が感じられた。

自転車モデルコースについては、雨の中とはいえ試走を通じてまとめたものであり、住民間での一応の合意形成はできたといえる。しかしながら、オプション等を含めた詳細なルート設定については、検討はまだまだ不十分であり、ルートとして提供するにはブラッシュアップが必要なものが多くあると考えられる。一方で、これらの地域資源と連携した自転車モデルコースを支えていく基盤となるしまなみの駅「御島」や「道の駅多々羅しまなみ公園」で行われているレンタサイクルシステムの不備（レンタサイクル事業のPRやプロモーション、自転車の質の担保やメンテナンス、自転車利用に向けての指導、地域情報の提供等の不足）の改善をあわせて行う必要もある。

さらに、自転車道において路面の補修が必要なところ、休憩所が必要だと指摘された所、落ち葉や砂等が散乱して危険な地点があるなど、自転車モデルコースとして不備な地点があり、早急な改善が求められる。

2.サインについて

今回検討したサインについては、その基本的な考え方として、利用者の視点に立った情報提供を柱にサインづくりに向けた方向性が検討された。その内容は、次のとおりである。

<安全面に関する情報提供>

歩行者や自動車との交通に関するもの、道路勾配上危険だと思われるヶ所に関するもの等

<目的地までの案内に関する情報提供>

地域資源や食事場所や休憩所等の目的地まで行きやすくするための案内に関するもの等

<地域資源の内容に関する案内情報提供>

多くの地域資源が抽出されたが、これらに関する歴史、由来、構造物の特徴など地域資源の紹介に関するもの等

サインについての考え方は上記のように多岐にわたっており、これらの内容について、公共サイン、半公共的サイン、私的サインに分類しながら、サイクリングに関する様々な情報を伝え方について検討するだけでなく、今後は、これらのサインの制作における官民の役割分担等について協議を進めていくことが求められる。

3.運営体制について

自転車モデルコースの設定とサインについての考え方についての立案を経て、これらのプランを実現していくためには、次のような課題が考えられる。

自転車モデルコースや地域資源のネットワーク化、マネジメントの実施、さらに、受け入れ窓口や情報発信体制（ポータルサイト化）の一本化等を実施することが必要であり、民間団体設立や事務局機能の強化等を行う必要がある。さらに、このような民間団体の設立に向けては、行政等からの継続的な働きかけと支援を行うことが重要である。この場合、国、県、市の連携はもちろんのこと、土木、農林水産、観光、教育などについて行政内部の縦割りを排除した、横断的なネットワークを活用したプロジェクト方式による対応が望まれる。

しかしながら、伯方島の場合と同様に住民にとっては、島の活性化につながるツールが、なぜサイクリングなのかについて考えることもなく、自転車モデルコースについて提案することを求められてきた。島の活性化に関するツールについては、サイクリング以外の多くの選択肢が考えられるはずである。なぜ、サイクリングなのかについて検討したうえで、参加したメンバーが（多くの住民が）サイクリングを主体として考えることが重要であるとの動機付けを明確にする必要がある。また、住民の関わり方については、具体的なテーマを設け検討をすすめていく手法が効果的だと思われるが、本事業においては、十分な検討ができていないため、今後の課題である。

このような過程を踏むことによって、今回設定した自転車モデルコースやサインに関する基本的な考え方に基づいた、大三島住民の関わりが具体的になり、行動目標が明確になる。そうすることで、よりサステイナブル（持続的）なものになるはずであり、ひいては大三島の活性化に寄与すると考えられる。

4.ワークショップの進め方について

本事業においては、1回の事前説明会と4回のワークショップを実施したが、参加者の評価やスタッフの評価では、事前の準備や配布資料や説明のわかりやすさ等については高い評価が得られたようである。

参加者間の交流については、既存の既知グループにまとまった面もあり、新しい交流が不十分だったとの指摘が多く見られ、新しい動きの誘発が不十分だった。また、情報共有の面については、参加したメンバー間ではできているとの意見が多くあったが、1回あたりのワークショップの時間が2時間と限定せざるをえなかったことから、前回の振り返りや当日の協働作業の確認が不十分だったこともあり、詳細な面については不十分さが残ったきらいがある。一方、不参加の人たちに対しては、ワークショップ後にニュースレターを発行し、事業の周知を含め一定の効果があったように思える。

参加者数については、議論を進める上では適切であったといえる。また、トライアスロン協会の関係者やサイクリストの参加を得ることができたことが良かったが、若者、子どもの参加やその他のスポーツ関係グループ等の参加等多様な主体となる人たちの参加が得られず、今後の課題となった。

開催日時については、受託者である特定非営利活動法人まちづくり支援えひめとしては、

土日の午後を想定して企画していたが、住民サイドにおける参加しやすさを考慮して平日の夜の開催となった。専従職員が少ないNPOとしては、スタッフの確保、開始時間の設定など今後課題を残した。

総合的な評価としては、限られた条件の中では一定の評価が得られたようである。しかしながら、一方で、事業を企画する段階からの住民参加ができていないこと、事業を取りまとめる時点で実行委員の協働事業としての役割が不明瞭になるなど、住民参加型協働事業という面からは、住民参加の徹底という面では課題が残った。

今後、この自転車モデルコースづくり事業の成果を地域の総意として、地域でのモデルコースの活用が進むよう成果のフィードバックと官民の協働事業の展開と中間支援組織の継続的なかわりが必要である。

3. 平成 18 年度住民グループリーダー研修事業 <愛媛県委託事業>

□事業実施期間 平成 18 年 1 2 月 1 5 日ー平成 1 9 年 3 月 1 5 日

(1) 事業概要			
<p>「えひめ町並博 2 0 0 4」開催時、自主企画グループとして住民グループがイベントに参画し、終了後も活発な活動を続けている住民グループや新規に活動を開始した、またはこれから活動を開始しようとする住民グループのリーダーを対象に、地域住民の想いや可能性を引き出す専門的技術を修得するための研修を実施し、住民グループの育成や維持及びネットワーク形成に資する。</p>			
(2) 研修内容			
全 2 日（終日）の研修を 2 回実施した。			
区分	場所	開催日	参加人数
1 回目	宇和島市三間町	2 月 1 日	3 5 人
	三間コスモス館	2 月 2 日	3 3 人
2 回目	宇和島市吉田町	2 月 1 5 日	3 5 人
	吉田公民館	2 月 1 6 日	3 2 人
<p>【1 回目】住民の想いや可能性を引き出すファシリテーションの技法やリーダーシップについて修得。</p> <p>【2 回目】第 1 回目の復習と実践的なケースワークによるブラッシュアップ、各グループの意見発表、専門家からの実体験に基づく講話、参加者相互の交流。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 研修は、住民グループのリーダーを対象に、リーダーの育成やネットワークを形成するために、参加者の想いを引き出し「企画立案」及び「事業化」に必要な項目を実践ケースワークとともに実施し、各グループの意見発表、専門家からの実体験に基づく講話や参加者相互の交流（情報交換）を実施。 ・ 事業実施後も活用できるよう研修用テキストを作成。 			
(3) 事業実施後の反省事項			
<p>今回の研修は、実際の地域での活動に役立ついくつかの専門的技術を習得することを目的に実施され、ワークショップなどを通じてその技術の習得を行ったが、一方で日頃、地域で行われている自分たちの活動について直接話したり、検討したりする時間があまりなかった。</p> <p>吉田の最終日のプログラムを「参加者からのプレゼンテーション」とし、地域で実際に行われている活動の紹介や現在抱えている課題等について話してもらう時間を設けたが、それぞれの話が広がりを持ち、時間を随分オーバーした。参加者のニーズを感じた。次年度以降、この事業が継続される場合は、この点を考慮し、それぞれの地</p>			

域での活動そのものについて悩みや課題を話し合える時間を持つようにしたい。

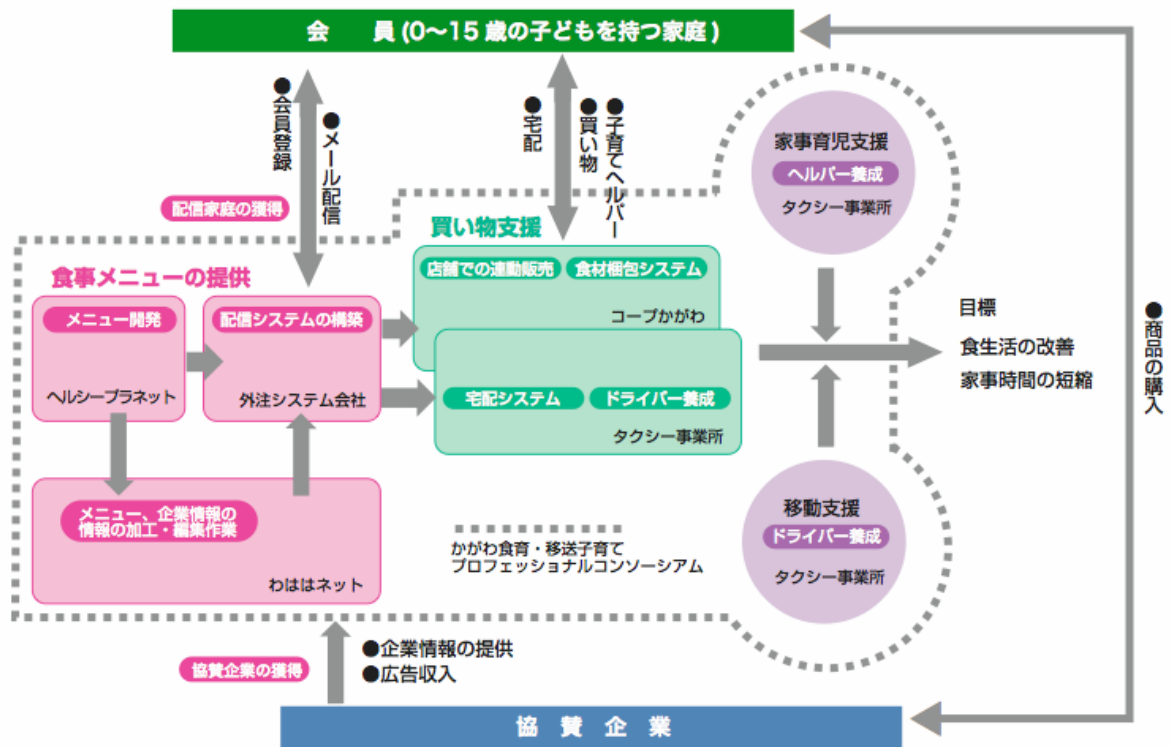
さらに、西予市のUさんから南予の着地型観光を進めるうえで、2、3ヶ所を組み合わせたらいいのではないか。西予市では、開明学校、民具館、中町界隈の散策であるが、それらを重点的に絞って、宇和島、津島、南楽園、大洲、内子方面へ出かけてもらい、そのときに行き先の観光担当者と連絡を取っておき、お迎えの体制を整えると、お客様の印象が良くなる。今回の研修会の縁を大切に交流したい、との提案があった。このように、研修会を契機としたネットワークを作り上げることができるような時間を持つことも提案したい。

4. かがわ食育・移送子育てプロフェッショナルコンソーシアム
事業実施期間 平成18年7月～平成19年2月

(1) 事業概要

今回の事業の全体像は以下のとおりである。(図表1-1. 事業概要図)

図表1-1. 事業概要図



① 食事メニューの提供

子どもの健やかな成長の手助けとして、また毎日の献立に悩む親の負担を軽減させるため、携帯電話のメール機能を利用して手軽に作れる食事メニューの配信を行った。ここで配信するメニューは、それぞれの家庭の子どもの成長に合わせた安価で手に入りやすい旬の素材を活用するなど食育を考えるきっかけとなる内容を盛り込んだものとしている。

② 買い物支援

配信されたメニューの内容にそった食材コーナーを店舗入り口付近に設置するなど、購買しやすい仕組みづくりを行うことによって、忙しい子育て家庭の家事時間の短縮を図る。さらに、毎日配信される食事メニューに使用される食材について、タクシー事業所による配送システムを構築するとともに、食事メニュー以外の子育てや生活に必要な

商品やサービスについても、食材の配送と連携した宅配を行うことによって、子育て家庭の買物に関する家事時間の短縮等の負担の軽減を図る。

③ 家事育児支援

調理や洗濯、掃除、育児などの支援が必要な家庭については、要請に応じて別途子育てヘルパーの派遣を行い、核家族や親戚等の生活形態によっては頼る人がいない家庭に対して家事育児支援を行う。さらに、子どもの年齢に応じた地域の子育て情報などを提供することで、子育て家庭に対する親の孤立感、情報不足からくる悩みなどの解決を図る。

(2) 事業目的

事業全体の目的は、家事時間の短縮による子育て環境の改善（家庭内コミュニケーションの充実、子どもと向き合う時間を増やす）及び食環境の改善を行うことである。本委託事業では、これらの事業目的を実現するために、食事メニューの提供、買物支援、家事援助支援のためのシステムを構築することを目的としている。

(3) 事業実施体制

本事業において、組成したコンソーシアムの実施体制及び外部協力団体について役割等を次に取りまとめて記述する。（図表 2-17. 実施体制図）

図表 2-17. 実施体制図

コンソーシアム	食事メニューの提供				買物支援				移動支援	家事育児支援	事業評価	報告書作成
	メニュー開発	配信システムの構築	配信会員の獲得	協賛企業の獲得	店舗での運動販売	食材梱包システム構築	配送システムの構築	宅配ドライバーの養成				
関係事業者 総括・連絡調整												
わははネット ◎	△	○	◎	◎							○	○
コープかがわ	○	△	○		◎	◎	◎					○
大和タクシー他 4社			△	△		○			○	◎		○

ヘルシー プラネット		◎		◎									○
まちづくり支援 えひめ	○		○	○						○	◎	◎	
(外注先) 中庭情報サービス			○										△
(外注先) ミッタシステム			◎							○			○
(協力団体) 香川県シルバー 人材センター連合会										○			△

担当種別の記号は適宜設定してください(例:◎;主担当 ○;担当 △;フィールド提供)

(4) 事業成果

この事業の主旨が現代社会の課題解決（子育て不安、食育の乱れ、仕事と子育ての両立困難、コミュニティの崩壊など）のために立ち上がっており、これらの課題解決に向けて一定の評価が行われている。

仕事と子育ての両立については、女性の意識が就業を選択する傾向を高めている中で、依然として固定的な男女の役割分担意識や雇用慣行などがみられ、必ずしも女性が働きやすい生活・就業環境となっていない。このことが、女性が結婚後仕事と合わせて家事や育児を行うことに伴う精神的・肉体的負担感を増大させるなど、両立が困難化している。

コミュニティの問題については、保健センターや子育て支援センター、保育園や児童館などで様々な子育て支援サービスを利用している家庭、保護者は多くいるが、保護者同士が主体となった自主活動、あるいは住民同士が助け合う互助活動はまだまだ活発とはいえない。親が子育てに自信と責任を持って取り組むためには、親同士の交流を通じた互いの具体的な育児方法の情報交換や地域の子育て経験者からの体験に裏打ちされた助言が有意義であり活用すべき地域の財産と考えられる。子育て支援を有効に進めるためには、自助、互助、公助が効果的に機能することが重要であり、子育てをともに支え合うコミュニティづくりが求められる。これからの社会はこのような生活者の課題を解決し、地域として魅力の有るものにしていかないといけない。そういった中でこのように異分野の団体がネットワークを組んで子供達の健やかに育つ環境作りに取り組んでいる本事業については社会的意義が高いといえる。

また、本事業については、以下のような観点から、顧客満足度の高いビジネスモデルとして構築される可能性があり、地域社会の問題を解決するコミュニティビジ

ネスとして社会的意義は高いといえる。

(1) 生活課題を解決しようとする生活ニーズから発想した総合的な事業展開

本コンソーシアムの代表団体である特定非営利活動法人わははネットの会員に対するヒアリング等により、食事メニューの配信、当該食事メニューの食材や作り方の情報提供、子育てに関する生活者の視点によるコラムの配信、素材の買物支援、家事援助のシステム構築などの子育て支援や食育に関する課題を解決すべき事業を総合的に展開している。

(2) 携帯メールを活用した双方向性のある事業展開

サービスの提供者から顧客にサービスが提供され、そして顧客からサービス提供者に対してダイレクトに携帯メールを通して率直な意見が届いていることから、これからの一方通行のサービス提供ではなく、リアルに顧客の声を聞くことができ、その声を取り入れ反応できる即時対応型のビジネスモデルとして、より顧客満足度の高いサービスがうまれている。

(3) 携帯メールという時代にあったツールの活用

いまや生活必需品と化しており、コミュニケーションツールとして様々な人が活用している携帯電話のメール機能を活用しており、時代にあったツールを選択している。

(4) 公益性の高い事業として社会で支えていける仕組みの構築

NPO法人を支える仕組みとして、市民が市民の公益的活動を支えていくという仕組みを、ビジネスの世界に持ち込み、社会的要請の高い事業を応援している企業イメージの向上とあわせて、子育て家庭への販促やマーケティングツールとしても活用できる仕組みを構築している。

5. 「会議道 Q&A 集」編集事業 <まちづくり支援えひめ自主事業>

(1) 事業の目的

昨年度市民塾で実施した会議についてのワークショップの成果を活かし、会議の進行に資するパンフレットを制作し、お困り会議の役に立たせたい。パンフレットの概要について検討し、制作にとりかかるために必要なことを確認する。

(2) 事業の経緯

- ・ 以下の内容について話し合い、パンフレットのイメージを固めていった。
- ・ どういう人のためのパンフレットか どのような会議を円滑にするための内容にするか
- ・ 決めるための会議、効率よく合意形成を図っていくための会議に資するものに。
- ・ 会議の主体が団体（NPO）であるか、地域の課題を解決するための集まりであるかにより、会議の前提条件が異なってくる。すなわち、NPO 内部の会議では目的は参加者によって認識されているが、地域の集まりでは目的やビジョンの構築からしなければならない。
- ・ 地域のリーダー・まちづくり支援をする人が使える内容にするためには、参加者が抱えている現状から課題を抽出する過程が必要。課題が整理されれば、それに関心がある人が集まって課題解決のための集団へと移行する。（NPP→NPG→NPO）
- ・ 市民塾の塾生や、坂の上の雲のまちづくり記念館で活用されることを考えるならば、住民の会議から目的・課題を整理するために参考になる内容を、導入部分に盛り込むではどうか。
- ・ 一般的にも会議の目的が見失われがちであるので、目的をはっきりさせる過程については重視したい
- ・ 1月中：内容の整理、2月中：編集・体裁を決定するための企画会議を開催

(3) 構成案

構成	内容
①表紙	
②目次	
③はじめに	構成員の意見を引き出す会議を円滑に進めることを目的に～
④会議の進め方	「会議道」の内容を編集、調整

⑤Q&A	市民塾で出たQ「困りごと」を【準備編】、【会議中編】、【会議後編】および【その他】に時系列に整理。Qに対し、参加者とホスト・ファシリテーター・事務局のそれぞれがとるべきA「対策、心得」を示す。強調したいアイデアなどは、コラムか吹き出しのようにして盛り込む
⑥ワークショップ の手法	アイスブレイク
	KJ法
	ファシリテーショングラフィック(板書)
	5W2H
⑦おわりに	
⑧〇カ条	

サイズ・ページ数	A5 版、24 ページ
印刷部数	1000 部
予算(千円)	◆印刷 60、◆イラスト 3x10 カット=30、◆デザイン 60
販売価格	500 円(！)
期日	5 月中に原稿は納入する(！)
イラスト担当者案	日野理英さん
デザイン担当者案	立田さん、石丸さん、稲田さん